各校の授業を振り返って

吉田研作

全体的感想

各校の授業及びその後のディスカッション、また、講師の先生方のお話を通して、この講座の成果が随所に現れていて、感心しました。

全体を通して外国語活動、外国語、そして小中連携、JTEお一人の授業からALTとのティーム・ティーチングまで、小学校英語でみられるほぼ全ての形態が実現されていました。

全体としては非常に良い授業ばかりだと思いますが、いくつか気になった点について今回の講義でお話しさせていただきます。

１）スモール・トークについて

本授業で扱われる表現や言語形式にどれだけ限定するべきものなのか。本時の「めあて」の前が良いのか後が良いのか。

a. テーマ、言語形式を無関係な **small talk**。英語の環境作り（生徒が興味を持てる話（**e.g.** アニメ、小中学生向けの話題、**JTE**や**ALT**が経験した面白い話など）。ジェスチャー、非言語情報等を使う

b. テーマ、内容につながる **small talk (**特にその時の授業で導入される言語形式と直接関連している必要なし。**)** テーマと関係のある単語や意味概念を導入し、児童が見当がつくように**gesture** や五感を利用して**scaffolding** する

c. 言語形式の導入**(Input flood**や **input enhancement** で児童にとって意味内容という点ではやさしいもの　→　言語形式に意識を向けられるように**)**

d. TTなど対話の中で行うのが行うのが一番だが、一人の場合は必ず児童との理解を確認しながら行う

２）文法の扱いについて

a.　学習指導要領の基本的な考え方
文 及び文構造を基本的な表現として扱う。言語活動を通して分かるようにするとともに，文法の解説をしたり複雑な文になったりしないように留意する。

b.　教師の**input** 対 生徒の**output**
（例、３人称単数の－ｓはどこまで必要なのか）

教師からの**input**では正しい表現を使用することが大切。生徒に**output**を求めるかどうかは、

１）過去形のように生徒にも使ってもらいたい表現（単元で重要構文として重視されているもの）の場合は、**recast**などを用いて生徒の「気づき」を促す。
２）**3**人称単数のように生徒のアウトプットとして求めないものは、**recast**等「気づき」を促すことはせず、生徒のアウトプットが「文法的に正確」でなくてもよい。

c. 言語形式は普段から絶えず意味のある言語**input**の中に入っていればいざ「学習」の対象となったときにスムーズに習得される

３）日本語がどこまで必要なのか

（生徒自らの「気づき」の機会を奪ってしまっていないか）

a. 言語活動の説明や指示

通常の言語活動の説明や指示は **classroom English**。新しい活動の導入も、まずは英語で（ジェスチャーや視覚資料等を利用して）「気づき」を与えるようにする。生徒に分かったどうかを確認し、その後で最終的に日本語で確認をとっても良い

b. 内容の説明等

ALTがいる場合はできる限り二人で英語で内容の説明等をし、その確認を生徒にし、その後で日本語で最終確認をしても良い

c. あるテーマに基づいたタスクの準備段階で、まず日本語で生徒の意見や考えを聞き、それを教師（**ALT**と一緒に）が英語にしていき、最終的なタスクでは英語でできるように指導する

d. 机間巡視などの際に個別指導で必要と思われる場合

e. 日本語は言語活動、意味内容等の最終確認の際に使い、生徒の理解の確認のために使う

４）小中連携は何を共有することなのか

（内容、単語、構文、それとも教授法）

a.　小中連携の最も有効とされる形態は、共同で統一カリキュラムを作り、それに沿ってどっちも授業を行うこと

b. 内容面での連携

中学で出会う先生、クラブ活動、体育祭、文化祭など、中学生活・小中学生の共通の話題（小学生と中学生の比較をしてみるのも良い）

１）中学生からの英語の**input**
２）ビデオ、対面、中学校訪問など
３）中学生を小学校に呼び英語の授業に参加してもらう

c. 言語材料の共有

小学校と中学校の教科書、あるいは、共同開発したカリキュラムに出てくる共通の語彙や構文が使えれば上記 **b.** の活動が実行しやすくなる（お互いが使っている教科書等を研究しておく必要がある）

d. 教授法の連携

中学校はどうしても旧来の構造シラバスに基づいた**PPP**の教え方をまだしている場合があるが、小学校は外国語活動から外国語へというシラバスをベースにしているので、その間の調整が最も難しい課題

５）recast と repetition, requesting, confirmation等の関係

児童の「気づき」を促す方法として　recasting や prompting が最も良く使われるが、もう一つ大切なのは、コミュニケーションをしているときに相手が言ったことがはっきりわからなかったとき、あるいは、自分が言ったことが相手に伝わったかどうか分からないないときのcommunication strategyとして negotiation of meaning (意味の交渉）。

Clarification of meaning　　どういう意味ですか？　もう一度言ってもらえませんか

What did you say?　*Could you repeat that again?*　　*(Excuse me?　Pardon?)*

Confirmation of meaning　　つまり、～ということですか？

Do you mean ～?　　*In other words……?*　　*（repetition　　e.g.　Blue?)*

Comprehension of meaning　　私が言いたいことわかりましたか？

Do you understand what I mean?　*See what I mean?*　　*(Okay?)*

児童が英語での言い方が分からなかったときに使う **How do you say this in English?** なども **communication strategy** として大切

６）中間評価の役割及び振り返りなどについて

言語活動の途中でそれまでの生徒のやり取りから気づいたことをチェックして児童と共有する「中間評価」のポイント整理

a.　教師が気づいたことで、特に多くの児童にみられる問題点を取り上げる

正しい表現の繰り返し（場合によって複数の表現）

b. 生徒の面白い、良い表現等を取り上げて紹介する

c. フィードバックの際にはすでに活動の前に練習している表現の場合は基本的に説明はあまりいらないが、その他の表現の場合は、時によって、日本語を交えた説明が求められる

d.　**ALT等、他の教員の指摘**を大切にする。

ALT調査で多くの**ALT**が自分たちが「人間扱いされていない」（単なる練習道具、機械）という不満が大きかった点を考慮する必要がある